

いろいろある、「里親」のカタチ

赤ちゃんの子育てをもう一度



山梨県の主婦、知世さん(56)と夫章介さん(60)=いずれも仮名=は里子の3歳男児を育てています。男児は1歳2カ月のとき、乳児院からやって来ました。2カ月後、初めて歩きます。部屋で立ちあがると、2、3歩、よたよたと歩きました。「わっ、歩いたよ!」。知世さんは思わず叫びました。「泣きそうなほど感激しました」

夫婦は30歳の長男をはじめ実子を6人育てました。男児を迎えて最初の1年半、知世さんはつきっきりで過ごしました。ベビーカーで散歩したり児童館の幼児教室に通ったり。「久しぶりの赤ちゃんがうれしくて」



男児は最近、料理に夢中です。知世さんが餃子の皮を伸ばしているとき「やりたい」「やりたい」と近寄ってきます。洗濯物を干しても、「ばあば、ばあば」と寄ってきます。また、章介さんが出張から帰ると、

「じいじ!」と玄関まで飛んできます。「じいじ」と「ばあば」にべったりです。

「実子の時は余裕がなかったけど、この子と遊ぶ時間はとても長く、こんなにたくさん絵本を読んだり散歩をしたりするのは初めてです。かわいい」と目を細めます。そんな「ばあば」に、男児がぎゅーっとしがみつきました。

男児がいた山梨県の乳児院「ひまわり」には来客用の浴室や個室もあります。里親が委託前に通い、入浴のさせ方や離乳食の作り方、抱き方などを練習するためです。職員の小田切則雄さん(70)によると、「里親さんは最初はこわごわ抱っこします。でも、赤ちゃんにいやされ、引き取るときにはお父さん・お母さんの顔になっています」とのことです。

不妊治療をやめ4人の子の里親に



東京都八王子市の菱山優美さん(41)・佑輔さん(42)宅のリビングには、4人の里子の入学式や七五三、旅行などの「家族写真」が並んでいます。

20代前半で結婚しましたが、子どもに恵まれませんでした。優美さんは不妊治療を2、3年続けて疲れていたころ、仕事帰りのバス内で「親を必要としている子どもがいます」というポスターを見かけ、児童相談所に電話しました。

里親登録から約1カ月後、見相の連絡で乳児院に行き、3歳だった男児(現在16歳)と夫婦で面会します。翌日また行くと、佑輔さんは「お父さん」と呼ばれました。「会うたびにかわいくなり、仕事帰りに

に毎日のように通いました」

約3カ月後、一緒に暮らし始め、休日の過ごし方ががらりと変わりました。公園やプールが多くなり、ショッピングは減りました。「朝起きて、着替えさせて、ご飯を食べさせて。昼間は、砂場や児童館で遊んで。全部が楽しい」と優美さん。

たくさん育てたくて養子縁組里親ではなく養育里親を希望。男児(同12歳)、女児(同10歳)、男児(同4歳)も加わり、今は、上の子が下の面倒をみます。優美さんは子どもたちと触れ合う時間に充実感を感じています。「この子たちに出会えて本当によかった」

◎こんな「里親」もあります◎

「これなら私にも」週末里親[※]で2人を迎えて

大阪府の遙花さん(54)と晃さん(58)=いずれも仮名=は中学生の姉と弟を、3年前から毎月1度、1泊2日で受け入れています。「週末里親」という取り組みです。

受け身だった晃さんも、子どもたちが実際に来てみると、虫取りに連れて行ったり、公園で自転車の乗り方を教えたり、積極的に関わっています。「実子が成長して会話も減っていただけに、夫も楽しいようです。高校生だった実子の二女もお世話をし、大学生で下宿生活の長女・長男も帰省するとかわいがってくれました」

2人は授業参観に遙花さんが来るととても喜ぶそうです。先生に当たら



れて答えたあと、振り返って遙花さんの姿を確かめます。2人は何が食べたい何がしたいと最初は言えませんでした。施設では食事や日課が決まっているからです。本当はポケモンの映画に行きたかったのに言えず、遙花さんから言ってあげると、「実はそれに行きたかった!」と大喜びしました。

遙花さんは「今度来たときに何をしたら喜ぶだろうと考える時間が多くなりました」と話します。姉弟の両親とは連絡がつかない。「大人になっても実家代わりに頼ってほしい」。遙花さんたちの思いです。

※週末里親・季節里親

お正月や長期休み、週末などに1泊~1週間程度、子どもを預かります。児童福祉法上の「里親」ではなく、自治体によって制度の有無や呼称が異なります。

養育はチームで

子どもと一緒に暮らすのは里親ですが、委託を行う地方自治体も養育を支援します。児童相談所や支援機関などの担当者が訪問や電話などで子どもの状況と一緒に見守り、困った時には一緒に考えます。